

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 6月 3日現在

機関番号：12601

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2010～2011

課題番号：22820020

研究課題名（和文） 古代ローマ帝国元首政期における皇帝とイタリア諸都市の
関係についての考察研究課題名（英文） A study of the relationship between emperors and italian cities
in the early Roman empire

研究代表者

中川 亜希 (NAKAGAWA AKI)

東京大学・大学院総合文化研究科・学術研究員

研究者番号：80589044

研究成果の概要（和文）：皇帝や都市の名望家たちの財政的貢献が、各都市の碑文において、どのような「徳」を示す言葉によって表現されているのかを調査した。その結果、イタリア全土では *munificentia* という語が好まれたが、北部のみに注目すると特に *liberalitas* という語が用いられたことが明らかになった。北イタリアは共和政末期の政治家ユリウス・カエサル（Julius Caesar）の政治的地盤であり、カエサルから様々な支援を受けたと考えられる。その記憶があるため、カエサルと結びつけられる語 *liberalitas* が帝政期にも好まれたと結論づけた。

研究成果の概要（英文）：I studied *virtutes* by which the financial supports of the emperors and the local elites are expressed and admired in the inscriptions. As a result, while the *munificentia* was preferred in whole Italy, I proved that the *liberalitas* was favorably used in North Italy. North Italy was the sphere of influence of *Iulius Caesar*, a political leader in the last years of the Roman Republic, who would support this region in various aspects. Paying attention only to North Italy, I concluded that because of that memory the *liberalitas*, a term associated with *Caesar*, was preferred also in the early Roman Empire.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,210,000	363,000	1,573,000
2011年度	1,110,000	333,000	1,443,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,320,000	696,000	3,016,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：西洋史

キーワード：古代ローマ・皇帝・イタリア・都市・碑文・徳

1. 研究開始当初の背景

ローマ皇帝は、神殿、柱廊、劇場、浴場、橋などの公共建築の建設や修復のための費

用を援助したり、貧しい子供のために基金を設立して生活費を支給するアリメンタ制度など、主として財政的な支援を行うことによって、帝国内の各地方都市に関与した。皇帝

による財政的な貢献は、各都市に残存する碑文によって証明され、そして、しばしば特定の「徳」を示す表現によって称賛された。この場合の「徳」とは、ラテン語の *virtutes* であり、いわゆる美德というよりも、賞賛すべき性質を一言で表現する賛辞である。それらの賛辞は、都市の側による皇帝の評価、あるいは都市において人々が抱いていた皇帝のイメージを表現するものである。皇帝と地方都市との関係性を端的に示すものであると言える。したがって都市において発見された皇帝に関する碑文に注目し、特に都市が皇帝の財政的支援をどのような言葉で表現することによって、皇帝との関係性を明らかに示したのかを調査し、皇帝と地方都市との関係、そしてそれを利用したローマ帝国の支配構造について考察しようと考えた。

皇帝の徳に関する従来の研究は、貨幣に関するものが主である (J.R. Fears(1981), *The cult of virtues and Roman imperial ideology*, *ANRW* II.17.2, pp.827-948; A. Wallace-Hadrill(1981), *The Emperor and His Virtues*, *Historia* 30, pp. 298-323)。しかし、貨幣に刻まれた皇帝の徳の意味を考え、それのみに基づいて、当時の政治的及び社会的状況について考察することは非常に困難であり、したがって貨幣についての研究のみからは、皇帝権力と諸社会層との関係性を浮かび上がらせるといふ、私の研究の目的を達成することもほぼ不可能である。また皇帝の徳については、他にも M.P. Charlesworth, *The Virtues of a Roman Empire; Propaganda and the Creation of Belief*, *PBA* 23 (1937), pp. 105-133 などの研究があったが、地方都市の碑文に見られる皇帝の徳について、その地方都市との関係から考察した研究は、日本国内にも国外にも見られない。本研究では、従来の蓄積がある文献史料や貨幣における皇帝の徳についての研究とは異なり、地方都市の碑文という、皇帝の徳についての研究ではこれまで使われていない史料を主として使うことにした。都市で発見された碑文史料を使うことによって、皇帝の徳についての研究に、地方都市との関係性という新たな視点を取り入れ、独創的な研究を目指すことにした。

2. 研究の目的

私の研究の主眼は、古代ローマの元首政期の社会が権力をいかに受容したか、そして権力がいかにそれを利用したか、そしてそれをめぐる各社会層の動きを探ることにある。各社会層の動向に着目し、秩序の安定という視点から社会層の相互関係について研究していく。ローマ皇帝は、主として財政的な支援

を行うことによって、帝国内の各地方都市に関与した。皇帝による財政的な貢献は、各都市に残存する碑文によって証明され、そして、しばしば特定の「徳 *virtutes*」を示す表現を用いて称賛された。それらの「徳」は、都市の側による皇帝の評価、あるいは都市において人々が抱いていた皇帝のイメージを表現するものと言え、皇帝と地方都市との関係性を端的に示すものであるだろう。そこで、都市において発見された皇帝に関する碑文に注目し、特に都市が皇帝の財政的支援をどのような言葉で表現することによって、皇帝との関係性を明らかに示したのかを調査する。そして皇帝と地方都市との関係性、そしてそれを利用したローマ帝国の支配構造について、考察を試みる。各都市が、いかに権力と妥協を計り、各々の利益を守りつつ、社会全体の秩序が保たれることに貢献していたのか、ということ考察し、権力と社会の関係を探ることによって、ローマ帝国の支配構造の新たな側面を描くことを目指す。

3. 研究の方法

上述のような目的のために、碑文について調査し、集めたデータを整理する。碑文に登場する人物に関する情報はもちろんのこと、個々の碑文の背景を知るために、各都市の政治的、社会的、経済的状況を調査し、何故、その碑が作られたのか、すなわち、何故、どのような状況で、その人物が、ある徳を示す表現によって称賛されたのか、考察する。その上で、特に皇帝に関する碑文に注目し、他の碑文との比較から、顕彰碑文全体の中で位置づける。

本研究の目的からすると、ローマ帝国全土の碑文を調査すべきであるかもしれないが、各地域ごとに、背景、文化、慣習、伝統などが様々であり、全てを同一に扱うことはできない。様々な特徴を持つ地域がある中で、イタリア半島は早くからローマ市民権を特権的に付与され、市民共同体に組み入れられていたが、同時に他の地域と同様にローマによって征服された側でもあった。そのような二面性を持つ地域においてこそ、中央のローマとの関わり方あるいは距離の取り方の特徴が浮かび上がり、ローマの支配すなわち皇帝の支配とその浸透について見えてくるのではないかと考える。

次に対象とする時代は帝政前期、すなわち1世紀から3世紀までとする。碑文という史料の性質上、しばしば厳密な年代決定は困難である上に、対象となる数は決して多いとは言えない。よって、ある程度の年代的幅を取らざるを得ない。政治的及び社会的状況は時

代と共に変化していくので、その変化が皇帝の徳に反映されているのかを調べるができるであろう。また本研究は皇帝の徳について考察するのであるが、皇帝がある徳を所有することを示す一つの証拠であった称号は、次第に単なる前任者の模倣となっていき、4世紀にはほとんど意味をなさず、個々の皇帝の区別がなくなる。さらに4世紀以降は、キリスト教の概念としての新たな徳も増加していき、同時に従来徳の意味も変化した。したがって本研究では、1世紀から3世紀までの300年間に限定して調査する。

また皇帝権力と各都市との関係性を探ることが目的であるので、公的あるいは政治的な意図があると考えられる碑文においての徳を示す言葉の使われ方を調査する。広く人々に見られることを前提として作られた石碑の公私の区別は困難な場合もあるが、都市自体、都市参事会、同業者団体など、都市内の集団が関与していること、都市の公職を務めた者など、重要人物が関わっていること、像の台座など、見せる意図が特に強いと考えられること、この3点を条件として碑文を選別する。私的な碑文、すなわち墓碑等には、しばしば徳を持つことを示す表現が見られるが、これらは親族による私的な表現がほとんどであり、ここから公的あるいは政治的な意味を読み取ることはできない。したがって都市参事会決議が刻まれているなどの特別な場合を除いて、墓碑は対象としない。

徳を示す言葉としては、名詞の他、形容詞、副詞なども対象とする。

碑文に関する研究の場合、実物を見るのが不可欠である。更に、写真や詳細なデータが記載されている、都市ごとの碑文集や博物館のカタログなど、碑文そのものに関する文献、そしてイタリアの地方都市の歴史やプロソポグラフィに関する文献を、日本において入手することは、非常に困難である。したがって碑文史料についての情報を集めるため、イタリアの各都市の研究機関、博物館を利用する。また碑文という専門的知識を必要とする史料を扱わなくてはならないので、イタリアの碑文学者と意見交換を行い、時に助言を得つつ、研究を行う。

個々の碑文の状況を丁寧に探り、その裏に潜む共通の背景を見出ししていく。そして整理した史料のデータに基づいて、皇帝権力と各都市レベルの諸社会層との関係と交流の可能性について考察する。どのような言葉によって称賛されているのか、地域あるいは都市間での比較、時代による変化などを分析し、類似点と相似点を整理し、その理由を考えていく。最後に、皇帝が、都市に、どのように、どの程度、介入していたのかを考えることにより、どういう分野で、皇帝権力がその地域あるいは都市に印象づけられたのか、そして

それは、皇帝側が示していた徳とどのように関連していたのかを探る。皇帝側が示した政治的プロパガンダとしての徳は、各都市に普及していたのか、あるいは、各都市の状況が、皇帝の徳の選択に影響を与えたのか、という点を、ローマ帝国の秩序の安定という観点から考察する。

4. 研究成果

本研究では、北イタリアの碑文に注目した。そして皇帝や都市の名望家たちの財政的貢献が、どのような「徳」を示す言葉によって表現されているのかを調査した。そのためイタリアで調査、および史料収集を行い、また碑文の専門家と意見交換を行った。

北イタリアの碑文を調査し、徳に言及したイタリア全土の碑文に関する研究 (E. Forbis, *Municipal Virtues in the Roman Empire: The evidence of Italian honorary inscriptions*, Stuttgart / Leipzig 1996) と比較した結果、北イタリアでは、他の地域とは異なり、財政的支援を表現するために、*liberalitas* という語が特に好まれていたという特徴が明らかになった。*liberalitas* は気前の良さを表現する徳であるが、共和政期には時に過度の出費や賄賂とも結びつけられ、否定的な意味でも用いられていた。必ずしも肯定的な意味でのみ使われたわけではなかったのである。したがってイタリア全土の碑文を見ると、元首政期になっても、否定的な意味をも持つ *liberalitas* の使用は避けられ、かわりに同様に財政的貢献を表現する *munificentia* が好まれたと指摘されている。しかし北イタリアの碑文のみに注目すると、*munificentia* は圧倒的に少なく、*liberalitas* が好まれたことが明らかになった。

Liberalitas は、共和政末期の政治家ユリウス・カエサルと結びつけられる語である。そして北イタリアは、カエサルの政治的な地盤であり、様々な点でカエサルからの支援を受けていたと考えられる。したがって北イタリアでは、カエサルの *liberalitas* の記憶が帝政期になってもなお維持されていたと考えられる。そのため、首都ローマやその周辺では、共和政期の *liberalitas* についての政治的な解釈に基づき、帝政初期にも *liberalitas* の使用が避けられた一方で、北イタリアでは、カエサルの *liberalitas* の記憶から、イタリアの他の地域では避けられたとされる *liberalitas* が帝政期にもなお好まれたということを考察し、論文として発表した。

イタリアでは、個々の都市で、その都市で発見された碑文についての研究を専門の碑文学者が行っている。より広い地域で発見さ

れた碑文全体を対象として、それら全体についての傾向を考察した研究はあまり見られない。したがって、カエサルと北イタリアとの結びつきを、出土した碑文の傾向と関連づけた本研究は、イタリアの碑文学者にも独創的であると評価された。

また帝政期にもなお、共和政末期のパトロンであったカエサルの記憶の影響が認められることから、北イタリアの人々にとって、新たな支配者、政治的指導者、あるいはローマ皇帝とは、どのような存在であったのか、その支配をどのようにとらえていたのか、その精神性について調査することが必要であると考えようになった。北イタリアへのローマ人の到来が、人々の心性にどのような変化をもたらしたのかを探るため、まずは北イタリアにおける宗教的な変化に注目した。ローマ人の到来による宗教的な変化、そしてさらに、ローマ帝国がキリスト教化することによる地方都市での宗教的变化、すなわち皇帝の変化に伴う宗教的な変化についても調査していくことを考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

中川亜希、ガリア・キサルピナとカエサルー碑文に見られる *liberalitas* を通してー、地中海学研究、査読有、34号、2011、pp. 3-25

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中川 亜希 (NAKAGAWA AKI)
東京大学・大学院総合文化研究科
・学術研究員
研究者番号：80589044

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：